

季刊 連句 第15号

昭和六十一年十二月一日発行



季刊連句 第15号 目次

ロスでのハプニング（南柏雑記 13）…………… 1
『連句辞典』読後……………草間時彦………… 2
『連句辞典』書評（抄）……………今泉準一，石寒太，山田みづえ………… 4
祝賀・明雅先生古稀……………二村文人………… 7
市中の巻（1）……………東明雅………… 8
八戸俳諧倶楽部探訪の記……………二村文人…………12
紅葉大樹……歌仙……………東明雅（捌）・加藤耕子（文）…………14
第3回（昭和61年度）武翁賞発表……………16
絶頂の城……………20

第六回俳諧芭蕉忌 第十九回 猫蓑会……………22

第一部 正式俳諧興行 脇起り二十韻 百歳の気色

第二部 脇起り二十韻 初時雨 六卷

捌 馬場東夷 米谷貞子 中田あかり
杉江杉亭 坂本孝子 副島久美子

恥かしながら執筆の大役……………中川哲…………26

連句教室……………木犀 明雅 捌 鱗雲 徒司 捌……………28

式目歌……………11 連句会案内・雁帛往来……………29

表紙（猿猴）宮崎龍火子

ロスでのハプニング

南 柏 雑 記 13

雅

去年二月、ロス郊外パロス・ベルデスに住む娘の家で、子守りと芝刈りを二週間やり、それがとても楽しかったので、今度もそのつもりで、しかも二月行った時暖かだったので、今度は八月、さぞかし暑いことだろうと、半袖のシャツとズボン、それも普段着のごくラフなスタイルで行ったのが失敗だった。第一、八月と言ってもそんなに暑くない。気温は相当高いのだが、湿気がなくてさらりとしている。パロス・ベルデスは海につき出た半島だから、海風が強く、夕方など半袖では冷え冷えた。それから、日本を発つ時、俳人協会理事長の草間時彦さんにもよつとそのことをお話ししたら、向うの俳人を紹介して下さるとのこと、これもお茶を飲む位のことかと、気軽に御厚意を受けた。ところが、その紹介された竹本義人博士にお逢いしたらロスとサンディエゴで講演してくれとのこと慌てた。まさか、よれよれの半袖、汚れたズボン、ぼろぼろの靴では、いくら心臓の私でも外国の紳士・淑女の前に立つわ

けにはいかないではないか。そこですぐ近くのシアーズというデパートに行き、早速、一応の身のまわりを整えた。参考までにお値段は、上着一七〇弗、ズボン五八弗、靴六四弗。感心したのは上着もズボンもちつとも直さずにびたりとそのまま着れたことだ。日本のデパートでは、A6で間にあう私だが、ズボンは裾がまつてないので、それを合わせなければならぬ。だが、アメリカのはその苦勞もなくびったりだった。広いアメリカだが、私と全く同型の人間が居るといふことは嬉しかった。

ところで、肝腎の講演は八月十六日と十七日、サンディエゴの菊ガーデンとロスアンゼルスの日米文化会館で行なわれた。ロスアンゼルスには十万の日系市民が住み、サンディエゴとともに俳句の結社が幾つもあつて、なかなか盛んである。竹本博士も「鷹」(藤田湘子主宰)のメンバーの一人で、「病葉」(竹本義人全集第一巻)の著を頂戴したが、評論あり、詩学・俳学・歌学・随筆ともしり沢山の大変おもしろい本であった。しかも専門はミサイルの工学博士で、人柄のよい親切な方であった。聴衆は両方とも三十人程度、二世・三世の方が多かったが、四世ともおほしき人も交じつて、熱心に聴いて下さつた。私は芭蕉の話から連句、歌仙から二十韻の新しい形について大いに宣伝した。八月二十二日、竹本御夫妻を迎え、家内を交えて四吟の二十韻を作ったが、これがアメリカで初めての二十韻であることだけは確かである。

『連句辞典』読後

草間時彦

若いころは本が買いたくて仕方がなかった。

読みたい本はいくらもあつたし、読む時間も、有り余るほどあつた。しかし、買う金がなかつた。今は、本を買うぐらゐの金はなんとかなる。だが、買つても置く場所がない。眼が弱くなつていたので、長時間読んでいると、くたびれる。それで、買つても読み切れないことが多い。それで、欲しい本があつても、なるべく買わないようにしているのだが、辞典の類は見掛けると買うことにしている。

国語では小学館の『国語大辞典』漢和は大修館の諸橋大漢和。この二つがあると、大体は間に合う。『京都語辞典』とか、『江戸語事典』なども結構役に立つ。古語辞典はどれがよいのか、一長一短で判らない。角川の『古語大辞典』が完結すれば、信頼出来るものになるだろう。

さて、俳句関係では、明治書院の『俳諧大辞典』と『現

代俳句大辞典』。後者は私も編集委員だったので、良い面も知っているが、反面、項目の粗さと、内容的に片寄っていることも知っている。殊に、連句については、一応、通り一べんの触れ方に過ぎない。これは紙数の関係で、止むを得なかつたことだつた。専門の連句辞典が刊行されることを、ひたすら待つことだつた。

連句には専門語がある。専門語であると同時に、一座に共通理解出来る付号のような言葉であることもある。

「影の月」という言葉がある。連句をやっている人なら誰でも知っているだろうが、初めての人がこの言葉に突き当たったとき、何を調べればよいのか。『俳諧大辞典』にも『現代俳句大辞典』にも、この項はない。小学館の『国語大辞典』には流石にこの項がある。

かげの月(つき) 俳諧で、月という字を避けなくてはな

らない時、月の字を用いないで月を詠じた句を作ることとある。といって、小学館版全十冊を書架に蔵している人は少いだろう。そういうとき、『連句辞典』は便利である。もとより、影の月の項が入っている。

私は「影の月」は知っていたが、この辞典のページを繰りながら、随分知らない言葉があるのに気付いた。「たけくらべ」もそうである。「連句の座で誤って、長句に長句を付け、短句に短句を付けるのをいう」とある。そして、「俳諧名目抄」の「至極初心の雑会にままあることなり」が参考として引用されている。私も、シラフのときはめったにないが、多少、アルコールが入っていると、たまにこういうことがある。今度、そうしたら、「たけくらべをしてみましたがね」と言ってみよう。それにしても、「至極初心」ということか。私は失笑した。

恥をもう一つ。「聳物」という言葉がある。雲や霞、煙などだが、私は「そびえもの」と読むものとはかり思っていた。連句辞典のふりがなで始めて知ったが、「そびきもの」だった。よい勉強をした。そう言えば、「聳」には「そびく」という訓があったのである。「治定」は「じてい」と読みたくなるが、「じじよう」、「文音」は「ぶんおん」でなく、「ぶんいん」。今迄の指導書や解説書は読み方のふりがながないのが多かった。そういう点では、この辞典の各項目に読み方が記してあるのは有難い。

用語篇で難しく、執筆者が苦労したのは、付味についてであろう。心付とか物付とか、そういうことは実例を挙げて

も、なかなか判り難い。それを言葉で説明するのは苦労が多かったと思う。又、連句の故実や口伝に通じている俳諧師には通用するが、現代連句の実作者には、日常語として無用の言葉となっている語がある。そういう項目にどこまで重きを置くか、そのバランスには苦労があったろう。この辞典の題が現代連句辞典でなく、連句辞典であるところに、内容的に幅を広く持たせたいという編者の苦心があったのだと思う。

現代連句人にとっては、本辞典はある意味に於て、実用書である。例えば「稿」という言葉。人情が二句、人情なしが二句、又、人情が二句とつづくの言うのだが、多くの人は知らない。しかし、知ってしまおうと、

「ああ、ここは稿ですね。」

という言葉が容易に出てくる。「稿」は実用語として便利なのである。そういう言葉を実作者に教えるだけでも、この辞典は価値がある。

この辞典で、別の意味で貴重なのは人名篇である。この五十余人のうち半数は、従来の俳句辞典などで項目とならなかった人である。よく、ここまで調べたものと敬意を表したい。この人名篇は今後、他の辞典に孫引きされることは必至である。それだけ価値の高い文献なのである。

私の書架の辞典は、多く引くものは前列の手を出し易いところに置いてある。連句辞典も、たびたび、引っぱり出すであろう。もっとも、よい位置におくつもりである。

『連句辞典』書評(抄)

特殊性を心得た編纂

——週刊讀書人(九月八日付)

今泉準 一

連句に関心をもつ人にとっては連句辞典の出現は待望久しいものがあつた。本書の刊行はこの意味でまことに時宜を得たものと言える。用語篇・人名篇、そして巻頭に「近代連句入門手引き」巻末に「近代連句概説」・「近代連句略史」が載る。連句の特殊性をよく心得ての編纂と言える。

連句をやってみたいと思う人、また実際に連句をやっている人、近時この種の人はかなりの数になる。一方、実作とは関係なく、連句とはどのようなものかを知っておきたいと思う人、このような意味で連句に関心をもつ人の数も多い。本書はこのような人びとを対象として手軽にその要望に応じ得るように作られた辞書である。

連句入門書の類はすでに十指に余るものが公刊されている。これらを読んで感ずることは、当然のことではあるが、実作者の手になるものは式目(規則)の取り扱い等には具体的で大変わかりやすく説明されてあるが、その沿革

の説明に疎であり、また学者の手になるものはその逆である。編者東氏は周知のように国文学者であり、しかも実作者である。その上実作指導の経験も豊富で、入門書・作法書の著も多い。まず、巻頭の「近代連句入門手引き」を読むと、三〇頁に満たない解説であるが、従来(の書)に感じらぬがゆき・とまどいがなく簡にして要を得、わかりやすく十分に行き届いた説明である。もちろん私自身多少の異見もある。だがこれはいわば流儀を異にするそれぞれの見解というもので、その説くところはおおむね穩当である。しかも多くはその都度に断りがしてある。

ただこれについては本書全般に通じることでもあるので一つだけ要望を私見として述べておきたい。氏は「凡例」で、口伝の重要性に言及し、これを採し求めることは「至難の業」と述べているが、実はこの点でも氏は現存の人でこれに最も詳しい人のうちの一人である。従つてこの解説の中でも文献渉猟では得られない連句用語が出てくる。これらには断りをちよつとつけ加えられると、一般知識人には一層説得力のあるものになったのではないか。わかるものにはすぐわかることなので必要がないこともいえるので要望というだけのものである。ともあれ、連句と

はどのようなものかがこの簡潔な説明で十分に知り得る。

同様のことは用語篇以下にも言える。「用語篇」に「参考」の欄を加えた点は本書の大きな特色である。編著およびスタッフの方々の努力に敬意を表したい。三二四項目に絞ったことはかなり苦心があったことであろう。従ってこれに対する私見は省略する。これは「人名篇」を物故者に限った賢明さにも現れている。しかもその選択には学者的冷静さの現れる客観性がある。当・不当はとにかく、これには異論の生じることが予想される。これは「近代連句略史」でも同様である。しかし私の見たかぎりではその克明さ・正確さには驚きを覚える。座右に備えるに足る一書である。

(明治大学教授・国文学)

寒雷図書館(寒雷十月号)

石 寒 太

最近、連句が静かなブームを呼んでいるという。作家・評論家・詩人らで歌仙を巻いたり、連句入門書も、けっこう読まれているという。

そんなブームにあやかるとはいいが、今度、東京堂から『連句辞典』が出た。本書は、実作上での初心者に対する配慮もさることながら、連句の実作・鑑賞の手引き・研究の参考になるようあらゆる面に心を配って編集がなされた、はじめての辞典である。

用語篇・人名篇に分かれ、巻頭に「近代連句入門手引き」が付されているのもいい。また、巻末には「近代連句概説」「近代連句略史」「文献資料」が添えられ、これだ

けを読んでも、連句のおおよそが理解できる。

これから連句を実際にやってみたいと思っている人、実際にもう連句をやっている人、連句に興味をもっている人、こういう人が、いま随分と多い。このような時期に本書が刊行されたことは、まことに時宜を得たものであり、いい企画であると思う。

実作はしないが、連句とはどうなものなのか、連句というものを知っておきたい人、そういう人も多いように思う。そのような人々の知識にも十分応えるように解説されている。

岩波文庫をはじめ、連句入門書は、ないように見えていろいろとあり、十指に余るほどである。しかし、従来の書を読んで感じることは、当然のことながら、実作者の手になるものは、約束の取扱いは具体的で大変わかりやすく説明されているものもあるが、片方で歴史沿革の説明となると、ほとんど触れられていないものが多い。かと思ふと、逆に学者の筆になったものは、難解で実作の用をなさない。

本書の編者、東明雅は、国文学者であり、しかも連句の道の鍊達である。実際に何人かと連句を巻き、その連句集ももっている。

まず、巻頭の「近代連句入門」によって、連句の流れを知ることができる。

用語によって、そのひとつひとつの必要な知識を知ることができるとができる。

「用語編」に参考欄が付いているのも、この辞典の特色である。三二四項目は、はじめて連句を知る人々にとつては、必要にして十分な項目であらう。

付録として「歌仙季題配置表」「蕉風俳諧変化表」のふたつが付いているのもいい。素人には、まずこれが不可欠である。この表を前に置いて、仲間同志で一句づつ作つてもいい。しかし、はじめは適切な指導者がいることが、より望ましいことはいうまでもない。

用語解説の的確さ、克明さなど、どのひとつをとつても、従来なかった連句入門書となりうる。

現代における連句理解必須の知識と解説を盛り込んだ、この『連句辞典』は、きつと多くの人の座右の書となると、間違いない。

まず、読むこと

そして連句の座に入ること

——「木語」(十月号)—— 山 田 みづえ

連句ブームだそうである。それは十五年位前から仲間と可成り放恣な(というのはルール上のことで、ズブの素人を仲間にする為には捌きの裁量でそうなったのだったが)自由な連句をやつて来た私にとっては、ブームという感じはなかった、よく目をみはって周囲を見廻すと、十年位前から連句々々と騒いでいるのがわかるようになった。

それで、連句の話などもぼつぼつ求められれば話する機会が出てくる。その折に、連句に関する辞典、極く普遍的

でいいから、一括して連句の見渡しが出来るような一書がほしいと思つていた。我流でテキストを作つてしまうのも一法とは考えても、俳句の方が本業で、おまけに一誌をかかえ込んでいては、とでもそのような芸当は出来かねると思つていたところであつた。

復権する「座の文芸」連句の魅力と謳い出している。連句を母胎として発生した俳句をたしなむ人は、一度は連句をやつてみるといいと思う。芭蕉の七部集も連句をやつてみると、なるほどと思ひ当り、現代俳句では思いもしなかつた時代相や風俗の背景が、ありありと現出してくることを考えると、この辞典は大きい効果を、連句へ好奇心を抱いている人々により大きく働くだらうと思う。

この辞典は、極めて現代的、現場的で、実地に連句に一座してみたいと思ふ人には、手にとるように親切な辞典である。

人名の方で小宮豊隆(蓬里雨)・寺田寅日子・志田義秀・富山の人、下平可都三のことなど、知つてゐる人、知らぬ人など多く登場する中に、能勢朝次・星加宗一の名があつて、それぞれに感懐深かつた。能勢朝次を師とする人に中国北京で出会つた。東京文理大で習つたという刘先生であつた。星加氏は父の連歌の弟子に当り、戦後は松山連句会にあり伊予の俳諧をよく研究した人で、学生時代を知つていたのでなつかしい。連句ブームの波は少し落着くと思ふが、その時こそ眞の連句好きの連句が行われると思ふ。軽薄を瀟過して。

祝賀・明雅先生古稀

二村文人

今夏、東明雅・杉内徒司・大畑健治三氏の編集になった『連句辞典』が東京堂出版より刊行された。又、明雅先生には、昨昭和六十年三月古稀をお迎えになった。私も原稿の執筆をお手伝いさせていただいた一人で、その何回目かの編集会議が、偶然先生のお誕日にあたったのだが、神保町裏の安酒場で「おめでとうございます」と申し上げただけで、そのままになってしまった。多少改まった席でのお祝いの会を考えないわけではなかったが、先生御自身辞典の編集にお忙しい日を送り、又私達も原稿のはかどらない時期で、うっかりそんな計画を申し出ると、その時間があつたら原稿を書けとかえって叱られてしまいそうで、取り敢えずは辞典の完成を見るまでということにして見送りになってしまった。

信州大学の私達の学年は、女子七人に男子五人の女性上位で「花の国文」と呼ばれていたが、丁度先生の末のお嬢さんと同じ年ということもあつてか、随分可愛がっていただいた。昭和五十年、私達の卒業と時

を同じくして先生は還暦をお迎えになった。確か卒業式の夜だったと思うが、松本郊外の浅間温泉にささやかな祝宴を催し、半ば強引に赤いチャンチャンを着ていた。

さて、『連句辞典』の完成を機に、その出版記念会を兼ねて先生の古稀をお祝いし、親しく教を受けた者が一堂に会することになった。大畑さんと語り、九月十三日、場所は「根津の甚八」と定めた。この店の主人は、信州上田の出身で、真田十勇士の一人根津甚八に因んで、根津の地に店を開いている。実は明雅先生が定年で信大をおやめになって上京されたとき、在京の卒業生で歓迎会を開いたのもこの店だった。主人もその時のことをよく覚えていて、貸切り、飲み放題の席を用意してくれた。メンバーは、辞典編集の反省会の意味もこめて（実際には飲むほどにこの趣旨は忘れられてしまったが）、先生御夫妻、原稿執筆者、連句作品を提供して下さった方を中心に人選させていただいた。

当日は夕方から生憎の雨模様になったが、二十一名が集まり、狭い店の中は身動きのとれないほどになってしまった。会は大畑さんの司会で進行し、信大連句会の連衆加藤慶二・小出きよみ両氏の祝辞、旧制松高時代の教子武藤禎夫氏の乾杯、東京堂の菅原洋一氏の編集報告、徒司氏の真田十勇士の披露（徒司氏はそのために都立中央図書館まで足を運び当日を期していたが、既に店の戸棚の中に十勇士を記した書き物があり、せっかくの努力は報われなかった）と続き、記念に御夫妻の益々の御健筆を願って万年筆をお贈りした。そして、最後は松高寮歌「春寂寥」と長野県歌（「信濃の国」の大合唱でお開きになった。その晩、大畑氏ほか若手数名は、坂本孝子女史を語らって深夜の上野へ繰り出し、さら科の「天抜き」をさかかに、蕎麦屋に似合わぬ議論の花を咲かせた。さまざまな機会に明雅先生の下に集まって来た者達にとつて、お互いに新しい出会いの生まれた一夜であった。

根津の「甚八」借切り祝ぐや秋灯

徒司

「市中は」の巻 鑑賞 (I)

東 明 雅

私は朝日カルチャー・センターで、昭和五十六年十月から約三年間、芭蕉や蕪村の俳諧作品を講義していた。それは病気のため、中断したが、近ごろ、たまたま篋底にその当時の膨大な原稿の束を発見し、当時を偲んで懐しいとともに、切角のものをこのまま紙魚の棲家としてしまうのも惜しい気がして来た。当時、受講された方には繰り返すことになるけれども、初めての方には参考になると思うので、敢えてこれから本誌に連載するつもりである。「市中は」の巻を最初に取り上げたのは、「季刊連句」第九号から第十三号まで「連句の読み方・味わい方」として鑑賞した「木のもとに」の巻が、元禄三年三月の作品であるのに対して、この「市中は」の巻はその年六月の作品で、「木のもとに」の巻との読みくらべによって、芭蕉俳諧発展のあとを、端的に知ることができるとともに、この「市中は」

の巻こそ、芭蕉俳諧の精髓を示すものとして、定評があるからである。もともと、「猿蓑」には卷之五に「鳶の羽も」の巻・「市中は」の巻・「灰汁桶の」の巻、そして「梅若菜」の巻の四歌仙が並んでいる。このうち「梅若菜」の巻は芭蕉の句は三句しか出ていないので別として、他の三巻はいずれも傑作の評が高いけれども、「市中は」の巻が芭蕉・去来・凡兆と、「猿蓑」編集の中心となった三人の三吟であるのに対し、「鳶の羽も」の巻には史邦を加え、「灰汁桶の」の巻には野水を加えているのは、それぞれ巻に変化と特色を持たせようとする意図があったと考えられ、この点から言っても「市中は」の巻は、「猿蓑」俳諧の原点として、最も尊重されるべきものであろう。ただ、私はこのごろ老耄、老懶ともに、度し難くなって来ている。この稿不備な点多いだらうが、昔語りの繰り返言としてお

読み下されば幸いである。

市中は物のにほひや夏の月

凡兆

(三夏 夏の月 人情無)

まず、この上五の「市中」を「イチナカ」と訓むか、「マチナカ」と訓むか。多くの学者は芭蕉ならびに七部集の用例から「イチナカ」と訓んでいる。しかし、この市中が狭い市場に出ている月を詠んだのではなくて、町の中、巷の中に出ている月を詠んでいることは、折口信夫氏を除いて皆賛成しているところであり、伊藤正雄氏はわざわざ「市中を市場の中と解するのは狭い」と述べられている通りである。その他古典大系にも「市中Ⅱ町中・市街地」と注がある。市場に物の臭いをするのは当然すぎる程当然で、それは今で言えば熱帯夜といふべき頃の月と対称するには、あまりに小さすぎる。さればこそ、「市中」と訓む学者もその意は市街の意に取り、必ずしも、市の立つ狭いところに限定しないのであろう。第一、それでなければ、脇句の「あつし／＼と門／＼の声」の「門／＼」が響かない。また諸橋大漢和によれば「市」にはイチ・マチと両方の訓みがあり、芭蕉や七部集には用例がなくとも、凡兆の特異で鋭い字の使い方とすれば、阿部正美氏の挙げられた「炭俵」における「市中や木の葉も落すふじ嵐」の例も、作者が桃隣であり、その「市中や」に振仮名がない以上、確定的な証拠にはならないだろう。それに対して、天野雨山氏・萩原蘿月氏など、俳諧の伝統に立った人はいずれも

マチナカと訓んでいるのは、このような訓みぐせがあった、これを伝承したことを示している。わが師、根津芦丈翁もマチナカと訓んでおられた。俳諧は口伝が多いが、この「市中」を「マチナカ」と訓むことも口伝の一つなのである。現代の人の多くは、何か本に書いてなければ信用しないという癖がある。近世の俳人はそうでなく、師から口伝されたものを第一と考えた。これはどちらが正しい態度かと言っているわけではない。近世の文学を研究する場合には、近世人の心を大切にしなければならぬことは当然であろう。だから、私はあくまでも、「市中」は「マチナカ」と今後も訓むつもりである。

芭蕉は元禄三年六月上旬、京に出て、同月十八日まで、小川樅木町上ルの凡兆の宅に逗留した。この発句はそのあたりの実景であろう。当時の樅木通りの実態は詳かにしないが、凡兆が商人でなく、医を業としていたから市場には直接関係はない筈である。

さらにこの句を凡兆の芭蕉に対する挨拶の句と見る説がある。「凡兆は、幻住庵から甚暑の京のまちへ下りて来た芭蕉を迎えて、ねぎらいの一句を示している、と同時に『夏の月』はその涼味を寄せて、師の山居の清々しさを仰ぎ讃える体の、精神的表現ともなっているよう」（安東次男氏の評釈）。そこまで挨拶の意を取るのには、純客観描写をもって知られる凡兆の作品から見ても異例すぎるし、亭主にそれまで言われれば、客の芭蕉も挨拶に窮したであろう。ただ、「この市の中は暑くてむんむんしてどうも恐縮です

が、あの涼しい月でも眺めて安らいで下さい」位の挨拶ならば、芭蕉も気軽く、「いや、この夏はどこでも暑く、毎に暑い暑いと言っていますよ」と主人を慰め、挨拶を返した位のもので見たいのである。

市中は物のにほひや夏の月

あつし／＼と門／＼の声

凡兆
芭蕉

(晩夏) 暑し 人情他)

(現代語訳)

中天には夏の月がかかっているが、町の中にはいろいろな臭いが立ちこめ、人々は門口に涼みながら、暑い暑いと言っている)

(付心) 打添付・起情の句

△「脇は暑し／＼と言うが、夏の夜には付たる也。月は二句の間にあり、瓊、市中といふに門々と請て、声は物のにほひといふ人に対して情を結びたる也」(几童・付合てびき蔓)。但し、几童はこの句を其場の付けとしてゐる。

△「この脇、〃句ひや夏の月〃とあるを見込て極暑を顯して、見込の心をてらすなり」(三冊子)

(付味) うつり。発句の「市中は」に対して、「門々」、

「物のにほひ」に対し、「あつし／＼」は、付き過ぎる位近い。それよりも、この句は、太田水穂が指摘したように「前句を受けとるや否や、すぐと送り出たような句ぶりである。こういう付が気先で行った句というものであろう」と言っている方が納得されるところであり、前句のわくの

中で突嗟にそれも日常の会話をもつてつけたところにおもしろさがある。

(補説) 発句の「夏の月」は三夏である。発句が三夏である時は、脇で当季を定めるべきである。「暑し」という季語は、現在は三夏だが、芭蕉在世時代の歳時記類にはなく、「暑き日」はすべて末夏(晩夏)となっている。

さらに、三冊子を見ると、「又、猿蓑に、脇三を三体に仕わけてなし置たり。心付て見るべしと也」という芭蕉の言葉が記されている。この巻の外の脇の句を示すと、

○ 鶯の羽も 刷ぬはつしぐれ

一ふき風の木の葉しづまる

去来
芭蕉

○ 灰汁桶あくおけの雫しづくやみけりきり／＼す

あぶらかすりて宵寝する秋

凡兆
芭蕉

であるが、この三つの脇はどこが違っているのであろうか。これについて安東次男氏は、ひびき(「鶯の羽も」の巻)、うつり「市中は」の巻)、におい(「灰汁桶の」の巻)の三体に仕分けたものと言われ、阿部正美氏もこれに同意しておられる。しかし、これも俳諧師の口伝を伝えた清水瓢左氏の言「発句は皆人情無し」の句である。『市中は』の巻はそれに人情他の句を付け、『鶯の羽も』の巻は人情なしの句を付け、『灰汁桶の』の巻は人情自の句を以て付けたもの』の三体説も尤と聞こえる。要するに安東・清水両氏の説を加え合わせたところが、芭蕉のひそかな自慢ではなかったか。

あつし／＼と門／＼の声

二番草取りも果さず穂に出て

(晩夏 二番草 人情他)

(現代語訳) 今年は酷暑で、人々は暑い暑いと口々にこぼしているが、その代わり稲の成育がよく、二番草も取りきらぬ前に穂に出てしまった。

(付心) 二番草を取りつくさぬという点に重点をおけば、前句の人と同じであるから、其人の付けとなる。また、この句全体を一つの会話体と見る考え方もある(宮本三郎氏・伊藤正雄氏)もある。そのように見れば、対付というべきであらう。

(付味) 暑さの気分の移りとともに、背後からせき立てられるような繁忙の感じが、前句の「あつし／＼」「門／＼」などの句調と相応じている。「ひびき」の付けである。

天野雨山氏は「豊年の希望に輝くような気趣が、家建ちならび人市にみつという前句の脈かさに応ずる」という。

芭蕉 去来

(転じ) 都鄙と昼夜とに転ず(古集弁)にあるように場所・時刻を転じている。その上、打越・前句にあった一脈の涼しさが前句・付句では晩夏の極暑の風景に転じている。

式目歌

衣着や竹田の船路夢洩

月松枕 五句隔へし

同じ文字 神祇釈教恋無常

夜分時分三句去へし

天象に聳 降物 人倫や

名所 国名 二句隔へし

魚と鳥 獣と魚 木と草や

草と竹とはこれも二句去り

天象は 月 日 星 なり聳には

霞 雲 霧 煙 なりけり

降り物は 雨 露 霜に 雪時雨

みぞれ 雪丸に雪と知るへし

著 雅 明 東

連句入門

中公新書 508号
価 五〇〇円

芭蕉の恋句

岩波新書 91号
価 三二〇円

猫 蓑

永田書房
価 二三〇〇円

連句辞典

東杉内・大畑共編
東京堂出版
価 三五〇〇円

八戸俳諧俱樂部探訪の記

二 村 文 人

私が世話役をしている日本文学協会の近世部会では、毎夏、勉強半分遊び半分の旅行を続けている。今年で六回目になるが、一年目の太宰治の生家津軽金木の斜陽館以来、上田秋成の生母を調査するために訪ねた大和葛城山麓、同じ秋成『雨月物語』の「樊噲」を追って伯耆大山に登ったその晩の玉造温泉などでは、私が俄か宗匠を勤めて歌仙を試みたりもしている。

さて、今夏は久しぶりに東北へ出かけ、恐山から八戸、そして遠野のコースを歩いたが、その途中、八戸俳諧倶楽部の理事長関川竹四氏を訪ねた。『連句辞典』の俳席に関する用語の執筆を担当したとき、当地に伝わる正式俳諧興行の資料を提供していただいていたからである。正式俳諧の項を書くにあたって、東京に残る根津芦丈門の作法は、大山阿夫利神社や大林柚平氏の抱虚庵襲号の折などに実見しており、又獅子門についても、昨年、岐阜の国島十兩氏を訪ねて直接教示を得ていた。八戸のものはその実態がわからず、原稿執筆の際には、八戸出身の柏崎順子氏に調査をお願いした。此度は出来上った辞典を携えての表敬訪問というわけである。

八月十二日、晴天猛暑。八戸に一泊した翌朝である。市立図書館へ出かける一行に別れて、私は湊町上ノ山の関川竹四氏宅へ向かった。余談になるが、市立図書館には、藩

政時代からの読本その他江戸戯作の歴大な蔵書がある。私も数年前、丁度東北新幹線の開通した直後に訪ねたが、当時は木造の古い建物が書庫で、そこへ籠ってそれこそ手あたり次第に美本の数々を見たことを覚えている。関川氏のお宅は、鮫行のバスを柳町で降り、山手へ上って十王院の門前である。御主人は、年輩のいかにも温厚な方だが、倶楽部の運営の中心的存在であり、又『八戸俳壇の歩み』などの労作を見ると、その精力的な活動に驚かされる。

以下、関川氏の編集になる『八戸の俳諧』及び同氏からうかがったところに基づいて、当地に伝わる俳諧のあらましを記す。八戸の俳諧は、天明三（一七八三）年、第七代藩主南部信房が、江戸屋敷で雪中庵三世大島蓼太の門人楓台五来（八戸藩士窪田半右衛門）から立机の免許を受けて互扇楼畔李を、又令弟右京が百丈軒互連を号したのに始まる。俳諧史に八戸の地名が現れるのは、延宝九（一六八九）年、盛岡の知機軒幽閑の選句集『それぞれ草』に、八戸領久慈の林鳥軒の名が見えるのと、翌天和二（一六八二）年、当時仙台にいた大淀三千風の『松島眺望集』（芭蕉も一句入集）に、八戸周辺の数人の名があがっているのが初めであろう。又、芭蕉は『奥の細道』の旅の途次、元禄二（一六八九）年六月四日から九日にかけて、羽黒山本坊で歌仙一卷を満尾しているが、曾良の随行日記による

と、その席に南部殿御代参の僧浄教院こと珠妙が一座して、「澄水に天の浮べる秋の風」の句を残している。

現在、八戸の俳諧は、八戸俳諧倶楽部の名で存続している。当地の俳諧は、天明以来互扇楼・星霜庵・百丈軒・花月堂・三峰館の五大宗匠を中心に続いてきたが、明治三十六年、同倶楽部が組織された。現在の会の指導者は十六世星霜庵池田風信子氏で、六十名程の会員がいる。機関誌は発行されていないものの、次にあげる年に五回の雅会が欠かさず行われている。

正月

詠初雅会

四月十五日

古心忌雅会

五月十二日(旧曆)

梅香会

八月十五日(〃)

観月雅会

十月十二日(〃)

時雨忌雅会

古心忌は、八戸俳諧中興の祖と讃えられて昭和二十六年に歿した百仙洞北村古心の忌日である。このうち最も盛大なのが梅香会で、正式俳諧もこの時に興行される。梅香会は、先に述べた七代藩主信房が、陶淵明と菅原道真を尊崇し、淵明の別号五柳先生と菅公の梅に因んで、互扇楼の号を譲った後自ら五梅庵と称したところから、その忌日をこう名づけている。正式俳諧は、倶楽部創立当時は十年に一度の催しだったものを、会員間に作法が定着しないということで、数年前より年中行事化した。

作法のうちやや特徴的なところを次に抜き出す。まず、床には始祖畔李公の肖像を掲げ、その前に神酒・選米・野

菜・活魚・菓子・果物・水・塩が、それぞれ、三宝に盛って供えられ、床の左右には生花一輪ずつが捧げられる。立宗匠の挨拶の後、奉行(この呼称は獅子門にも残っている)の指図によって香司が床に進み、燭台に灯を点じ、香を薫く。奉行の「執筆いざ」の合図によって、執筆は文台を捧げ持って所定の席に着き、文台捌きの所作を披露する。又、読誦の際には、執筆が句の花の前で「花前」を告げると、奉行の合図によって香司は改めて香を薫き床に捧げる。宗匠は文台の前に左膝を立てて威儀を正し、同時に執筆も左膝を立てて花の句を吟声する。

雑誌『国文学』昭和61年6月号の八学会時評Vで高田衛氏は、同誌4月号の特集八連句のコスモロジーVに載った「獅子門翁忌古式俳諧」の誌上再現について触れ、「席札検閲やら献花やら文台捧進やら、そうしたセレモニーの一つ一つの無意味の意味をたどることで、連句というゲームを作りあげた近世人の精神の運動が見えてくる。」と述べている。

〔付記〕八戸の俳諧史に関しては、

○二川居桜曙誌・百仙洞古心編『八戸俳諧史』(昭和8)

○関川竹四編『八戸の俳諧——八戸俳諧倶楽部八十周年記念誌——』(昭和56、三百部限定非売品)

○関川竹四編『八戸俳壇の歩み』(昭和57、非売品)

が備わる。又、文台捌きの作法については、『八戸の俳諧』に藤井白兆氏(十五世星霜庵)が詳細を記している。

紅葉大樹

明 雅 捌

寄々て紅葉大樹に駒止めし

客人迎へ月を待つ林泉

捨扇ひらかれしまゝ置かれぬて

摺り立ちの出来て笑ふ子

広角の焦点合はずバルコニー

新そら豆の青の輝やき

武蔵野の古き仏の坐し給ふ

三道染煩惱できぬ卒業

その昔言へざりしこと長枕

細きジープン軒に吊るさる

大根に刃をしめらせつ刻む餅

日なたぼっこでいつか古稀すぎ

マラソンのゴールタオルで抱き取られ

皇太子妃も人波の中

階の一言主の神の面

鳥曇りして軽い風邪っ気

塗腕に朱を撰びたる月と花

曲水いつか右折左折し

耕子

明雅

正江

千町

榲晴

哲

江

晴

町

哲

晴

哲

町

江

同

町

耕

哲

紅葉大樹に身を寄せて

加藤耕子

心寄せ合うと見せて実は丁々と切り合う連句の世界。何とも豪華な空間の遊び。六義園心泉亭・楓の間には、おだやかに上品な面差しが、それでいて油断のない眼が四囲にはりつめられていた。

たとえ少々もたついたとしても、それはそれとして、明

裏山にトランベットの復習ナオふ音

別れられないレディ・ニコチン

「鬼殺し」五合ばかり飲みつづけ

日脚を追ってすさまじき痺

被りたるものの中より瞳の濡れて

貞操強いるおきて破らん

夢芝居ありもせぬことあるやうに

囲炉裏に紡ぐ婆の繰言

夕されば次々と灯の点る丘

北京郊外城壁の月

モダニズム久生十蘭秋乾く

ひさびさに見し蓑虫の顔

遺言書厚き金庫に眠るままナワ

男もすなる料理編物

石畳つひリズム踏みフラメンコ

春雨のあとけぶる紫

花筏うかべ大川悠々と

眼をこらす切風の果て

昭和六十一年九月廿六日

於 東京六義園心泉亭

町 晴 哲 晴 江 哲 町 江 町 哲 耕 町 同 江 晴 哲 晴 町

雅門の精鋭衆との知的興奮の醍醐味。表六句はまずおだやかにすべり出した。所が、裏に入ってから裏腹とは将にこのこと。月と花とが何気なく出て来るまでどうなるのかと思つていたら、突然、やんややんやの喝采・握手。これは目の前に揃えられた昼食の景物にすぎないのだが。さてそれからが、又も右折左折の面白さ。瞳うるむ麗人と見れば、娼婦の血が流れているとか。月は北京城外にあがり、騒ぎに何事かと秋乾く蓑虫の顔がのぞく。捌は、丹念に連衆へ礼をつくされる。かくて、悠々と流れる大川にうかぶのは、花筏ばかりではなく、切風の影か、それとも葉騒をかえす櫂の風声か。

江戸の水、懐紙に置かれた名菓の親心、明治百年のジャパニーズ・スパイス、等々と、今は一景一景たのしく反芻させていたゞいている。そうそう、今度は、白桔梗用上等のサボンを持参せねば、と又の日をたのしみにしている。

第三回 武翁賞発表(昭和六十一年度)

歌仙 白 露

上月 淳子 捌

連衆 氏原 正雄・山口 みづゑ

米谷 貞子・大窪 瑞枝

雑賀 遊・坂本 孝子

二十韻 竹皮を脱ぐ

桜井 天留子 捌

連衆 福井 隆秀・米谷 貞子

秋元 正江・原田 千町

努力賞

二十韻 端 居

文音 佐土原 婦美枝
中田 あかり

賞状副賞 各参万円

選考委員

東 明雅
草間 時彦
杉内 徒司

本年度武翁賞には歌仙八篇・二十韻六篇の応募があります。さらに、二十韻「端居」の佐土原さんはお目が御不自した。選考委員が慎重に審議した結果、歌仙「白露」と二十韻「竹皮を脱ぐ」の両巻が入選しました。昨年の受賞作が、いずれも文音であったのに対し、今年の作品はともに座の中で生まれたものである点に、意義の深いものを認めました。差し上げることになりました。

(十月十一日)

歌仙白露

上月淳子捌

街路樹を風鳴らしゆく白露かな

上りそめたる金色の月

永頭諭話やうやくほぐれきて

撫でゐし猫の眠るゆり椅子

ペナントに優勝カップ置き並べ

麦稈帽を忘れ行きたる

瑞垣に噴井溢るる音閑か

誘ひの言葉妙にやさしく

したたかに酔はすつもりが酔ひつづれ

中絶カンパ廻す教室

書記長の器かんばし双葉より

富士を取り巻き湧き起る雲

明星も添ひて冴えたり冬の月

終電車待つ足の冷たき

啖呵壳覚えるまでのひと苦勞

護国寺の庭餌捨ふ鳩

花の下バスより園児こぼれ来る

雛の土鈴ころころと振り

淳子

正雄

みづゑ

貞子

瑞枝

遊

孝子

貞

孝

枝

孝

遊

遊

雄

貞

遊

枝

ゑ

^ナ春塵の淡くかかりし文机

金太郎飴婆のしはぶる

写真とるブルーメリアのレイをかけ

メイドインジャパンスーベニールは

喪服着て数珠は持ったか黒揚羽

不倫の相を秘むる掌

あれもいやこれも飽きたと妻を抱き

壁の鏡が厭な告げ口

滔々と大河の果の海に消え

胡弓流しつ過ぎる裏町

月祀りつくり伝へし絵臘燭

するりいちぢく剥いてくれる子

^ナ秋刀魚焼く煙の中を帰り来し

大礼服の曾祖父の像

過疎村に一つ残れる萱の家

目借時なり髪刈られつつ

吾が庭の若木の花を眺めゐる

面打つ人の臍ろなる影

昭和六十一年九月八日

於K・D・D会館首尾 連衆

貞雄

枝

遊

同

孝

ゑ

貞

雄

孝

貞

遊

遊

枝

雄

ゑ

淳

孝

正雄・山口みづゑ

氏原 瑞枝

米谷 貞子・大窪

雜賀 遊・坂本 孝子

二十韻 竹皮を脱ぐ

桜井天留子 捌

武翁賞応募 作品一覽

竹皮を脱ぐやすつくと崖ツツの空

天留子

朝の目覚めに鳴ける郭公

隆秀

てのひらに卵豆腐を切り分けて

貞子

宿題持って子等の集まる

正江

金色の鷓尾に月さす東大寺

千町

えのころ草でそつと撫でられ

同

上気せし頬に迷へり新走

秀

中国孤児の帰る故郷

江

柴根染立ちやわ涌しほりあざやかに

貞

番頭そろばんやつと差出す

江

よき夢も喰はれしやうで猿枕

町

ボルシチの湯気窓くもる月

貞

チエーホフの「三人姉妹」幕下りぬ

秀

渴くがごとく求めにしひと

町

片翼の天使となりて翔んでゐる

江

マンガチックなほくの絵葉書

秀

南海の思はぬ島に赴任して

貞

若駒群れて東風に遊べる

町

花守の嬰籙として卒寿なり

秀

春挽絲をもらふ縁先

江

昭和六十一年六月七日

於西国分寺多喜窪公会堂

連衆

福井隆秀・米谷貞子
秋元正江・原田千町

歌仙

一 銀杏散る 膝送り 東夷 遊 弘子 麻子 和子

二 小春 東夷捌 遊 正雄 貞子 瑞枝 淳子

三 三極 文音 天留子 隆秀 正江

四 野坡忌 哲 捌 和子 麻子 隆秀 美保

五 もやひ舟 膝送り 淳子 貞子 和子 良子 千町

六 青嵐 膝送り 遊 杉亭 正雄 遊 弘子

七 街路樹 淳子捌 正雄 みづゑ 貞子 瑞枝 遊

八 あす白露 櫻晴捌 千町 哲 久栖 正江 隆秀

二十韻

一 枯野 麻子 捌 照代 郁子

二 年の市 東夷 捌 節子 洋子 和 和世 千尋

三 聖五月 篤子 捌 啓世 麻子

四 竹皮を脱ぐ 天留子捌 隆秀 貞子 正江 千町

五 芒 淳子 捌 郁子 麻子 美保

六 端居 文音 あかり 婦美枝

二十韻 努力賞 端居 文音

さまざまな苦難に耐えて端居かな

打水をして匂ふ土くれ

形よく木綿豆腐の盛られるて

びたりとしまる鉄瓶の蓋

満月に金の穂ゆるる音聞こえ

寄りそふ袂はらむ秋風

おぶはれておんぶしてみる虫の中

ふくみ笑ひの道祖神立つ

酒のびん命日だけは飾るらし

エアロビクスに痛む節々

雪催ひ扉をたたき宅急便

冬の月です判を下さい

預貯金の利率わが意にしてみたく

眼下モルジブ珊瑚礁あり

不倫としてフォーカーカスされし白き肌

恋のさやあて忍ぶ逢引き

山里にかすかにありしけもの道

① 帆に霞かかりぬ

躰糸とりてふわりと花衣

紫雲英めがねの二輪車をこぐ

佐土原婦美枝
中田 あかり

枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り 枝り

私達の二十韻

中田あかり

私は二十数年間俳句をやっている。だがそれは自分だけの世界で、中途失明の婦美枝さんには時々聞いて貰うしかない。婦美枝さんと連句を巻こう。二人で一つの作品を完成する喜びを持ちたい。

しかし連句も知らず、運座に出席できない婦美枝さんに、連句の面白さを解ってもらうにはどうしたら良いか。

市中はものの匂ひや夏の月 は婦美枝さんの感覚に訴えられると思いつき、この巻の鑑賞をはじめた。余情をもつ発句、それを支え風情を添える。第三の転じ。戦中・戦後を生き抜いた私達の時代そのものが転じ。そして軽く納める四句め。

ここで婦美枝さんの発句が生れた。私は嗅覚の土の匂いを服につけた。料理好きの婦美枝さんが盛りつけ具合を手でたしかめる第三。てらてらと磨かれているであろう鉄瓶を四句めにおいた。

これは婦美枝さんがじかにさわれるものである。

式目のむづかしさで、敬遠されては困ると思ひ、それからの私は、一期一会の運座の話をした。人は同じであっても時は戻せない。生々流転にも似た喜びと悲しみ。捌の手腕は一座の連衆を和合させ、捌の句の取り方により運命的ともいえる一卷の流れ。婦美枝さんの連句に対する興味の芽が育つように、話は楽しい笑い声の中で続いた。

昭和六〇年八月一日起首
昭和六一年三月二十八日満尾

絶頂の城

付勝練習歌仙

東 明 雅

投句締切
1月20日

凍てる月ロシアの古都に妻とあり
為すこともなくつい鼻毛抜く

十五句目

- 17 治定 叱られて上目づかひに拗ねる犬
- 16 煙突の煙まっすぐ上りゆく
- 15 寺を継ぐ筈がいつしか馬の足
- 14 出し抜けに隕石どさと落ちて来て
- 13 指先を動かす度に猫がじゃれ
- 12 政策に追はる円高・高齢化
- 11 陀羅尼誦で声の尊くおはします
- 10 骨董屋おやじの講釈まだ続き
- 9 ひと様の学歴なんぞ言ふまじく
- 8 我が庵は都に遠く地価安し
- 7 蹴とせば拒食症にてすねる猫
- 6 年はもう幾つか猫の化けさうな
- 5 無人駅少し離れて高架線
- 4 艶のよい猫が畑土かきまぜる
- 3 栗鼠走る行きつ戻りつ籠の中
- 2 部下はみな頭顔よくすばしこく
- 1 店先の柱時計がボンと鳴り
- 円高のけふも滞貨の山はけず

- 孝子 正哲 隆秀 蓼艸 妙子 美子 昌子 美保 正雄 和子 東夷 千町 清之 竹代 治子 雅代 杉亭 天留子

☆が糞をしようと思をまぜる手の器用さに見とれたという。そう承れば「艶のよい」という修飾もうなづけなことはない。根が切れていておもしろい句である。14はのんびりと鼻毛を抜く人に対して、動くものを付ようとされたもので、こんな付け方を対付という。狙いはおもしろいのだが、表現にもう一苦勞欲しかった。たとへば、「籠の中行きつ戻りつ栗鼠走り」とひっくり返しただけでも印象は大分違うと思うのだが。15はやはり対付的だが、この方にはやや根が残る。16は15のトボケた気分の延長で、はつきり根が切れていておもしろい。17・18・19はそれぞれ前句の人がぼんやり鼻毛などを抜いている理由を述べている。このようなのを「根がある」というのである。それぞれに苦勞して考えられていることは分かるけれども、これでは一卷がべたべたと続くことになるから、おもしろくないのである。と言って、前句に全く関係のないものを出すのも困るのであって、この辺りのかねあいが連句の一番難しいところであろう。20「伝竹庵肩凝り薬」とは何か分からぬので適確な評は出来ないが、要するに煎じ薬を作るつれづれのままに鼻毛を抜いておられる様子であろう。とすれば、やや根があるとも思われるが、病体を出して来られたのは変わっていてよろしい。同じ病体をもろ出したのに22があるが、これとくらべてみるとおもしろい。21は古風であり、22は近代的だが、20にはやや隠れている「根」が22ではあまりにあらわに出ている。22は近代社会の現象を批判的に取り上げた点にも意義はあり、一句としては20より

- 18 独房の格子の窓の小さき青
 19 缺航の旅籠泊りもはや三日
 20 伝竹庵肩凝り薬煎じをり
 21 小なき虫行きつ戻りつ忙しげに
 22 三分の診察待つに三時間
 23 当分は「安竹宮」のせいくらべ
 24 過去未来ゆめまぼろしに痴呆症
 25 世帯裏まで見通しに住み古りて
- あかり
 力
 慶子
 都美子
 篤子
 哲
 正江
 淳子
- 1は前句との付合は上々だが、打越がやはり空の景だから、そこがまずかった。2はいかにも小説家らしい発想でおもしろい。釈教と四つ足と述懐を一度に出した所が巧みだが一巡の方で残念。3はまた奇想天外、元気に満ちておもしろかったが、やや「根がある」。4は軽い句だがもうすこし表現に工夫が欲しかった。5はやはり「根があり」、前句と付句とが軽いながら原因・結果になっているのがまづい。6・7はともに向付で、一方は僧、他は骨董屋であるが、ことに6は根が切れている。7はやや根が残っている。この辺のところを考えてほしい。8も一風変わった老練の句である。9は一句としては本歌取りの形でおもしろさこの上なしだが、そんな所だから何もする事もないのだという風にも解釈できる。それが難点である。10・11と続いて猫が登場。同じ猫でも11は為すこともなく御老人と共に老いた猫を偲ばせ、句にあはれとしをりがある。12は付心やや不明、もし無人駅の傍に住む人の述懐と見れば9と同じ難点がある。13は自他ともに許す猫好きの方で、猫☆

はるかに勝っているが、前句とつけて考えると、むしろ20の方がおもしろいと思う。21は14とひどく似ているが、栗鼠は無季であるのに対して、虫は秋の季語であるから、この句を採用するとあと二句秋の句を続けなくてはならなくなる。もう、そろそろ花の句が追っているので、このあたりで秋を出すと困るのである。23は時事の句、安倍・竹下・宮沢の三候補が中曽根氏の任期延長で出番がなくなり、お互いにせいくらべをしながら、鼻毛を抜いているという意か、これにもすこし「根」があるようだが、たとえはこの作品を十年後に読んで「安竹宮」が分かるだろうか。このような点も不安である。24も痴呆症の人だから、鼻毛を抜くより外に仕事はないと見るとやはり「根」があるのだが、この句にも何かあはれとしをりが感じられる。25の句も付心・付味がよいが三句目の転じが如何か。

治定の句、叱った人も叱られた犬も、無為のため、何かいらいらしているのであろう。だが、根はすっきりと切れており、叱られて拗ねる犬を「上目づかいに」と描写したところに、この主人と犬の心の葛藤が描かれているようでおもしろい。大勢の猫ファンにはお気の毒であったが、四つ足としては犬が登場することになった。

この句は元々は犬を描いた人情なしの句だが、叱る人、上目づかひに拗ねられる人の存在も無視できないから、自の句と解してもよい。打越ははっきり自の句だから、次の句は自の句でなければよく、もう花前の句だから、軽い句が欲しい。季は雑でも、春でもよい。もちろん短句である。

第六回俳諧芭蕉忌

第十九回 猫蓑会

恒例の芭蕉忌を十月十五日（水）深川芭蕉記念館で修した。本年は特に正式俳諧を初めて興行した。

その後、二十韻六巻を首尾した。
参加者 三十六名。

第一部 正式俳諧興行

百歳の気色 脇起り二十韻

次第 役割

第二部 初時雨 脇起り二十韻 六巻

(一) 次第

- 一、席入り (知司の指図により座見・座配の役)
- 二、配硯はびだ (重ね硯を配る)
- 三、供華くけ (花司)
- 四、執筆呼出 (宗匠)
- 五、文台捌 (執筆)
- 六、俳諧興行 (知司挨拶のあと連衆付句)
- 七、花前 (執筆)
- 八、献香 (香元・宗匠)
- 九、花の句披露 (宗匠・執筆)
- 一〇、端作はしづり (執筆)
- 一一、吟声 (執筆)
- 一二、文台返し (執筆)
- 一三、挨拶 (知司)

馬場東夷 捌

米谷貞子 捌

中田あかり 捌

初時雨初の字を我時雨哉

あつらへむぎの罝炬裏開く日

跳虫のをちこちとびの気配して

頬ふくらませラッパ吹くひと

月代の波止場に立てば風なる

願ひの糸を裾にからませ

竜胆を慕ひ野菊の乱れ咲く

そつとかくせし胸のふくらみ

おとなしく秤にのせてパンダの子

新人類か超人類か

刈り上げの髪染め踊る夏の月

水からくりの水の七色

密室を覗かせてゐる歌舞伎町

ボンと入れてよチュッと吸ひます

忿怒せし十二神将腕組んで

父の権威は今日でおしまひ

いまさらにむかしむかしの病出て

虚子の名付けし「小鼓」の味

刀師の打つ幕内に花の降り

延びつ縮みつ遠足の列

翁

東夷

篤子

てるよ

和世

哲生

子生

よ子

哲生

子生

世子

哲生

世子

哲生

よ子

子生

同夷

よ子

生

初時雨初の字を我時雨哉

蒼紅さす垣のさざんか

歌膝の男の袴正しゐて

心なごます渋茶一碗

しろじろと波の秀光る夕月夜

ロザリオ祭で結ばれた仲

火が恋し抱いてくれたる人恋し

馬鹿丁寧に敷布洗ひぬ

2DK壁の写楽の目が笑ひ

シェーブアップでビールがぼく

銭亀を捕へし子より買ひ受けて

長江長城中国の旅

厠口あけっぱなしに風がぬけ

はや呆けてきし舅姑

月青く夜鷹が騒る夜泣蕎麦

猫の枕に入れし付文

オペラ館なつかしグレタガルボなど

銀ラメ光る春の手袋

筆塚に絵筆納まる花おぼろ

蛇のうなりの耳にうるさし

翁

貞子

清子

明雅

みづゑ

雅代

雅代

清

ゑ

同

代

雅

代

ゑ

雅

清

雅

ゑ

清

代

初時雨初の字を我時雨哉

径消えぎえひろき朽野

飯盒の蓋もたぎりし匂ひにて

口笛吹けば危の跳びくる

屋上にのぼりて親し夜半の月

色なき風になびく黒髪

寄りそへる肩に秋蝶来る気配

稲村が崎踏切りの鳴り

リコールを乗り切る市長反対派

記録のかかる消化二試合

泡盛におくに訛りも許されよ

月に水母の透ける船端

業病と噂の旧家血の絶えし

マゾとサドとの熱きたはむれ

湯けむりに珠の胸もとときめきぬ

吉祥天の奏つ琴の音

生涯を名もなき画家として果てむ

高速道路追ひし逃水

花の宴台調廻しが幕のなか

ぶらんこゆすり遊ぶ父と子

翁

あかり

正江

彬風

弘子

弘子

よしえ

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

江風

恥かしながら執筆の大役

中川 哲

世のなかに連句という面白いものがある
と知りそめたのは戦争中の昭和十八年頃、
芝居も寄席もつまらなくなつて、ふと手に
入れた古本でたしか寅彦や豊隆が座談的に
「七部集」の評釈をしあっているのを読ん
でからです。

まさか四十年以上も経って正式俳諧の執
筆を仰せつかる廻りあわせになろうなどと
は夢にも考えていなかったのに……。

物憶えがわるいうえに天性の音痴、金欠
病にアル中気味といふハンディを背負いな
がら、義太夫にしても茶の湯にしても、と
にかく身体でやつてみたくなる悪癖があり
ます。

若いとき素人新劇の真似事をしたお陰の
芝居つゝ気と舞台度胸を頼りにして、明雅先

生の「やってみるかね」のお誘いにひよつ
こり飛びついてしまつた。

五月十一日に東横線の元住吉の神社社務
所みたいところで生れて初めての正式俳
諧セレモニーを拜見、その後三回ほど明雅
先生のご指導を受けて、今回の大役に挑ん
だわけです。

明治以降の西欧文化吸収の過程で、芸術
は個性的でなければいけないとか、型にと
らわれてはいけないなどという、それこそ
「さかしらごと」の猿真似でどれほど私た
ちの先祖が育くんできた良い伝統をなくし
てしまったことでしょうか。もちろん、型
にとらわれて心を見失ひ矮小化された先行
芸能の例もすくなくはあります。

私としては勤めさせていただく以上は、

まず教えてもらつた通りになぞつてゆく、
個人的な判断はいれないということをも自分
に課しました。実際は教わつた通りの真似
がきちんと出来るくらいならたいしたもの
で、及びもつかないのが当り前でしょう。
ただそういうように勤めてみることで、す
こしでも古典的規矩の雰囲気、きびしさを
セレモニーのなかに漂わせることができた
らと願つたわけです。

これが私の基本原則。猿芝居のパフォー
マンスに終わるか、誇りをもつた伝承の仲
継ぎ役たり得るかは、謙虚な心が形にとこ
まで響いているかで岐れ道になるとおもつ
たわけです。結果がどうであつたかは連衆
の皆さんの評価に俟つしかありません。

その場では無我夢中でよくわからなかったのですが、あとでビデオを観てなにより感じたことは、流れがそっかしかつたと。

息が短い、といふやつですね。登場してすぐの芭蕉像に対する真の礼、宗匠方に対する行の礼ともそそくさとしています。つぎの動きが気になって、相手の返礼が終らないうちに頭をあげて動きはじめてしまう。性根がすわっていないお辞儀で、宗匠方へはたいへん失礼だったと反省しきりです。心がこもっていない。執筆登場の前の配硯をした千町さんの挙措、流れが美しくリズムカルだったし、花司の和子さんが折角キチッと花鈿の音で場を締めてくださいたあとだというのに……。

興行にはいる前、文台捌きまでの間に一座の連衆に正式俳諧儀式列席への荘重な氣持と、作品創造参加への心の昂揚を醸し出すように執筆は演技しなければいけないものだなアと考えたのも反省のひとつです。

五番建て式能の序の「翁」の三番叟に要求される重さと軽みみたいなものが出たら最高だろうし、配硯、献花、文台捌きの流れにリズムやハーモニー、日本流にいえば

陰陽や真行草の美意識を籠めるといふことにもなるのでしょうか。

まアこんな理屈も一度経験してみても考えただけの話で、現場ではうる覚えの手順をすすめるだけが精一杯でした。それも、もうひとつ言えば、隣に明雅先生が坐っていて、うるついたら小声で教えてくれるだろうと頼りにしてしまいましたし、なに間違ってたって連衆はどうせ知っちゃアいねえんだからといふ居直りの上で「文台捌き」「端作り」「文台返し」を勤めました。事実、だいぶ間違ってもあったしゴタゴタもしました。先生が一番気を揉まれたことだろうと、申し訳なく思っています。

ただ私の茶の湯の庵主が「覚えちゃった通りに点てる点前くらいつまらないものはないよ」という教えを支えにして(いや、言訳にしてかな)思い出しながらの手順が「間(ま)」になるやうにと心がけてはみたつもりです。昔の六代目菊五郎みみたいな名人だと魔の間に見物がひきずりこまれたんでしょうが、私の場合は一座の皆さんをハラハラさせたり、しらせさせたりしただけのこととお詫びのほかはありません。

理想的にいえば完全に覚えたものを本番

では忘れ去って、身についた古典の規矩に則りながら動いていけば稽古以上のものになって昇華する、というのが最高でしょう。これは夢物語です。

一番いけなかったのは、興行中の「付け」の受け方、流れの盛りあげ方、宗匠に判定を乞ふ姿勢、どうもごたごたしてしまいました。

書記役のわきまめに性根の据わりが足りなかったのでしょうか。付けてくれた連衆への対応、宗匠への表敬、一座への配慮、どれをとってもなっていないようにおもいます。自分だけの動きで済ませられる「文台捌き」や「吟声」は、自分のペースなりにまアごまかすこともできましようが、そこに相手の人がいて、心の通いあった、正式俳諧の儀式性(古典的規矩の型)や寄合性が醸されるようにすすめることはたいへん難しい。

兎にも角にも、硯箱を持って飯座へ戻ったときはホッと一息つきました。

日本の古典に誇りを持ち、現代を生きて未来へ継承させてゆきたいことを願う布衣の一人として、貴重な経験を持たせていただいたことにただただ感謝あるのみです。

連句会案内

。連句教室

日時 第一日曜日 午後一時—五時

会場 関口芭蕉庵

文京区関口二ノ十一ノ三

(電) 九四一—二四五

。A・C・C連句実作入門

日時 第二・四水曜

午前一〇時三〇分—一二時三〇分

会場 新宿住友ビル四階

朝日カルチャーセンター

(電) 三四四—一九四一(代表)

。A・C・C連句・理論と鑑賞

日時 第二・第四水曜

午後一時三〇分—三時三〇分

会場 新宿住友ビル四十八階

。猫藪会(会員制)年四回

(二月・四月・七月・十月第三水曜日)

会場 松声閣

文京区新江戸川公園内

(電) 九四一—九六四九

。柏連句会

日時 第三日曜日 午後一時—五時

会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地マ

ーケット下車)

雁帛往来

▽俳文学者の東明雅氏がアメリカで、竹本義人・ガルシア繁子両氏の助力のもと講演を行った。ロサンゼルスとサンディエゴの二カ所において、

「現代に於ける連句の復興とその実状」

について話され、聴衆から質問も多々あり、連句復興がアメリカでも注目されていることが知れた。

(俳句文学館報61・10・5)

▽「猫藪会(深川芭蕉記念館・十月十五日)で正式俳諧が興行できたのは感慨深い」と指導に当られた明雅師がつぶやかれた。諸役の方々はいずれもそつなくつとめたが、中川哲氏の執筆は見事な出来、新進ながら現在の俳諧壇ではスタイル日本一の評を得た。稽古中の哲執筆の所作に、北見さとるさんは

歌膝の男は佳けれ白桔梗

と感嘆の句を詠まれた位であった。

▽第十四回俳諧時雨忌(深川芭蕉記念館十一月十六日)に於て明雅師は、「連句辞典のこども」と題して連句辞典

編纂の苦心談を約廿分話された。

当日の出席者八十九名。猫藪会からは十七名参加、各俳席に分れて付句を競った

が、秋元正江捌き歌仙の一巡句は左の通り

葱白く洗ひたてたる寒さかな

翁

しぐれ心地にのぼしたる春

秋元正江

竈猫猫好き猫に目がなくて

東明雅

カレーの匂ひながれくる窓

米谷貞子

月の出に應へて雲のたなびくか

草間時彦

初雁を見し山のわらんべ

坂本孝子

菊人形祖母の話の団子坂

中川哲

解いたはいいが結べない帯

上月淳子

季刊「連句」第十五号

定価 五百円

誌代 年二千円(送共)

発行 昭和六十一年二月一日

編集人 杉内 徒司

発行人 東 明雅

季刊「連句」発行所

〒277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二

電話 〇四七(七五)一一九二

振替口座 東京 七―五二―一三三

印刷所 神谷印刷株式会社

東京都豊島区高田一ノ六ノ二四

電話 〇三(九八六)一七一―一五

連句辞典

東 明雅・杉内徒司・大畑健治編

B6判
三五二頁
三五〇〇円
連句の実作・鑑賞・研究に
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使え
る本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語を選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越

思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字

景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

人名篇 天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋

鶴沢四丁 小林見外 下平可都三 関為山

高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二三〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季節語辞典

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季節語辞典

古典俳句に使われる季節は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季節二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 B5 一九〇〇円

国語慣用句大辞典 B5 白石六二編 A5 六八〇〇円

国語慣用句辞典 B5 白石六二編 B5 二二〇〇円

国語史辞典 B5 林巨樹他編 B5 三五〇〇円

日本語語源辞典 B5 堀井幸以知編 B5 一八〇〇円

京都語辞典 B5 井之口・堀井編 B5 一八〇〇円

擬音語擬態語辞典 B5 天沼・車編 B5 三五〇〇円

近世上方語辞典 B5 前田・勇編 A5 一五〇〇円

花柳風俗語辞典 B5 藤井宗哲編 B5 二二〇〇円

明治新語俗語辞典 B5 樺島忠夫他編 B5 三三〇〇円

難訓辞典 B5 中山泰風編 B5 二二〇〇円

名乗辞典 B5 荒木良遠編 B5 二二〇〇円

名数数詞辞典 B5 森・陸彦編 B5 二二〇〇円

あいさつ語辞典 B5 奥山甚朗編 B5 二二〇〇円

新版 ことば遊び辞典 B5 鈴木紫三編 B5 五八〇〇円

類語辞典 B5 鈴木・広田編 B5 二八〇〇円

類義語辞典 B5 徳川・宮島編 B5 二二〇〇円

表現類語辞典 B5 藤原身一他編 B5 四八〇〇円

新版 文章表現辞典 B5 神島・村松編 B5 二九〇〇円

東京堂出版

電話03-233-3741~2

101東京都千代田区神田錦町3-7